再び男たちへ

塩野七生

文藝春秋

再び男たちへ

塩野七生

フツウであることに
満足できなくなった

文藝春秋

著者略歴

1937年7月、東京に生まれる。学習院大学文学部哲学科卒業後、1963～68年までイタリア遊学。1970年、再度、イタリアに渡り、現在にいたる。フィレンツェ在住。
1970年、『チェーザレ・ボルジア　あるいは優雅なる冷酷』で毎日出版文化賞、1981年、『海の都の物語』でサントリー学芸賞を受賞。1982年、これまでの著作活動に対し菊池寛賞を受賞。1988年、『わが友マキアヴェッリ』で女流文学賞を受賞。
『ルネサンスの女たち』『神の代理人』『海の都の物語』『続 海の都の物語』『サロメの乳母の話』『わが友マキアヴェッリ』(中央公論社)、『チェーザレ・ボルジア　あるいは優雅なる冷酷』『イタリアからの手紙』『愛の年代記』『イタリア遺聞』『サイレント・マイノリティ』『コンスタンティノープルの陥落』『ロードス島攻防記』『レパントの海戦』『マキアヴェッリ語録』(新潮社)、『漁夫マルコの見た夢』『コンスタンティノープルの渡し守』(TBSブリタニカ)、『聖マルコ殺人事件』『メディチ家殺人事件』(朝日新聞社)、『イタリアだより』『イタリア共産党讃歌』『男の肖像』『男たちへ』(文藝春秋)の著書がある。

再び男たちへ

フツウであることに満足できなくなった
男のための63章

1991年4月1日　第1刷

著　者　塩野七生
発行者　新井　信
発行所　株式会社　文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町3—23
電話　東京03(3265)1211(代)

定価はカヴァーに表示されています
本文印刷　精興社
付物印刷　凸版印刷
製本所　加藤製本
万一、落丁乱丁の場合はお取替えいたします

©Nanami Shiono 1991　Printed in Japan
ISBN 4-16-345100-5

再び男たちへ／目次

第1章　清潔度ということ　11
第2章　人材について　15
第3章　容貌とは　19
第4章　混迷（カオス）について　23
第5章　帰宅拒否症なる現象について　27
第6章　愛人考　31
第7章　開国か鎖国か　35

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第8章　鎖国　39
第9章　続・鎖国　43
第10章　開国　47
第11章　政治家とは　51
第12章　政治改革　55
第13章　歴史について　59
第14章　人事について　63
第15章　フランス革命二百年・自由　67
第16章　フランス革命二百年・平等　71
第17章　フランス革命二百年・博愛　75

第18章　女の反乱　79
第19章　台所感覚　83
第20章　イタリア魂　87
第21章　帰国子女　91
第22章　帰国子女の親たち　95
第23章　ワールド・プロブレム（その一）　99
第24章　ワールド・プロブレム（その二）　103
第25章　ワールド・プロブレム（その三）　107
第26章　女たちへ　111
第27章　外圧について　115

第28章 ノーブレス・オブリージュ 119
第29章 共産主義（その一） 123
第30章 共産主義（その二） 127
第31章 共産主義（その三） 131
第32章 好感度について 135
第33章 百年の計 139
第34章 実力主義のプラスとマイナス 143
第35章 自己満足も程度しだい 147
第36章 国際人 151
第37章 国際化について 155

第38章 軽蔑 159
第39章 再びワールド・プロブレム 163
第40章 期限を切ることの大切さ 167
第41章 自由化 171
第42章 草の根・国際交流 175
第43章 人種差別（その一） 179
第44章 人種差別（その二） 183
第45章 書記長の涙 187
第46章 ヨーロッパ・ヨーロッパ 191
第47章 愛（いと）しきアメリカ 195

第48章　勝者の混迷　199
第49章　再びヨーロッパ　203
第50章　子供心の愉しさについて　207
第51章　企業と文化（その一）　211
第52章　企業と文化（その二）　215
第53章　企業と文化（その三）　219
第54章　執事の効用　223
第55章　虚と実　227
第56章　グルメ考　231
第57章　権力と知性　235

第58章 帽子の愉しさ 239
第59章 衰退の因 243
第60章 スポーツ、それ以上のもの 247
第61章 知識人 251
第62章 善と悪 255
第63章 無題 259

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

再び男たちへ

フツウであることに
満足できなくなった男
のための63章

装幀・坂田政則

第1章　清潔度ということ

戦争は悲惨で馬鹿げているからできうるかぎり回避されねばならないが、一つだけ利点がある。人間の欲求を単純化してくれるというメリットだ。自分自身と身近な人びとの生存ということだけしか考えなくなるからである。

ところが平和が支配的になってくると、人間の欲求も複雑化してくる。社会主義国では、統治能力を問う民衆の側からの運動が、文字どおりの百花繚乱の状態がつづいているようである。一方、うまくいったと得意になってよいはずの資本主義国でも、民衆が満足していないことでは同じなのだ。いずれも生存という最低の欲求が達成できた以上、人間の欲求はこの他にもあると人びとが気づいたからにちがいない。

これこそ平和の代償である。しかし、この種の傾向は人間性にとってはすこぶる自然のものであ

るから、戦争をしたくなければこれらを克服するしかないのである。

どこかの国では、酒に呑まれるたちで、女と見れば見境なく追いかける者は大臣にふさわしくないとして、上院で行われた「試験」では落第であったようである。もう一つの国では、世界で最古の職業の女たちとお友達になることは、どれほど政治能力に秀でていようとも失脚の最大要因とされるようである。また、別の国では、リーダーに求められる第一の資格は清潔度にあるらしく、何はともあれおカネには近づかないにこしたことなし、となったようだ。

酒に呑まれる性質ということになると、アレクサンダー大王などは完全に落第する。女に関してとなると、ユリウス・カエサル（英語読みだとジュリアス・シーザー）だって救われる可能性はなはだ少なしの部類に入ってくる。この男を心から慕った軍団兵たちだから、親愛の情を込めた冗談であったにしても、征服地に入城するカエサル配下の軍団兵たちは、次のことをシュプレヒコールしながら街の中央通りを行進したものであった。

「イイ女ならば身を隠せ。オレたちのボスはやたらと手がはやいんだ」

その上、クリーン度となれば、もうカエサルは完全に救われない。謹厳なるドイツ人の歴史家モムゼンをして、なぜだかわからないが融資してくる人には常に不自由しなかった、と言わせた男である。

マキアヴェッリの『君主論』のどこを読んでも、リーダーの条件として清潔度をあげている箇所はない。そのうえ、彼は次のようなことさえ言っている。

「指導者の最も心すべきことは、良き状態での国家の維持である。それに成功しさえすれば、彼のとった手段は誰からも立派なものと考えられ、称賛されることになるであろう」

だが、マキアヴェッリはこんなことも言っている。

「指導者たらんとする者は、種々の良き性質をすべてもち合わせる必要はない。しかし、もち合わせていると人びとに思わせることは必要である」

アレクサンダー大王もユリウス・カエサルも、戦時のリーダーなのである。平時のリーダーは、人びとの生存に対して責任をもたないですむだけ、人びとが指導者にもって欲しいと考える性質をもち合わせていると見せかける配慮ぐらいは必要ではないか。

ましてや、良き状態の国家の維持に対しては何ひとつ碌なこともしていないくせに、おカネを懐に入れることだけは熱心な指導者に至っては論外である。

「小人閑居して不善を為す」を私は、平時なものだから小人も台頭でき、それらがまた平時なものだから閑居でき、挙句の果に不善を為すようになるのだ、と解釈することにしている。平和の代償のこれもまた一面であろう。

だが、戦争にさえメリットがあるように、クリーン度追求の風潮にもメリットとデメリットの両面がある。メリットはこの期に大掃除をしようと思えばできることであり、デメリットは、小人でもないものまでゴミと一緒に捨ててしまうことである。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com